サスケ日誌
深瀬 昌久

自我懂事以來，我與貓就有著密不可分的緣份。我三歲時的一張紀念照中，懷裡抱著的三色貓叫做小玉，若我沒記錯，小玉應該一直活到了我高中的時候。直到牠的犬齒脫落，之後大約一年就過世了。或許牠是無法忍受自己顯露出蒼老醜陋的樣貌吧。

我是北海道傳承了兩代的一間照相館的長男。父親打算讓我繼承家業，於是讓我去念了日大的攝影系。我得意洋洋地戴著嶄新的學生帽，將裝著全新相機的相機包背在肩上，意氣風發地從北海道北端的中川郡美深町出發，花了38個小時抵達東京。我循著美深的腳踏車店老闆田中先生的介紹，在鄰近阿佐谷車站的一間味噌商店落腳。每當附近的中央線列車通過時，我那位於屋頂的2樓房間，便總會喀答喀答地隨之搖晃。天花板的屋樑外露，環境惡劣到令人難以想像是世間的景色，但即便如此，我心中燃燒著凌雲之志，所以不以為苦。

我向味噌店借了廚房，開始了自己煮飯的生活。然而我卻沒能持續做下去，大概到了第3個月的時候，我對煮飯就已經感到十分厭煩，於是就轉而依賴街坊麵包店的沙拉麵包，還有外食券食堂了。（*外食券:第二次世界大戰時和戰後，在米受到管制的情況下，為外食者所發行的餐券。）

話雖如此，我仍然為了為數眾多的老鼠而感到頭疼。照理來說，我的房間應該是沒有食物的，但到了深夜，牠們總是會在天花板和牆壁中，發出咯吱咯吱、嘎吱嘎吱的啃咬搔抓聲。即便我大聲踏步驅趕，卻仍驅之不盡，趕之不絕，不禁使我有些精神衰弱。某一次，我感覺被褥之中似乎有什麼東西在移動，於是清醒過來一看，接著便因突然飛竄而出的黑色巨大形體而飽受驚嚇。而且拜老鼠所賜，我的房間中充斥著跳蚤。雖然我在草蓆（我的住處並不是鋪著榻榻米那類東西的高級房間）下和棉被裡灑了DDT殺蟲劑，直至它們都覆蓋了一層雪白，但卻仍起不了什麼作用。最後我厭倦想方設法，認清了無能為力的事實，於是就撿來了一隻貓，並命名為小黑。

然而，我自己畢竟是過著飢餓難耐的生活，所以也只能偶爾給小黑吃沙拉麵包。而小黑因為遭到冷落，隨後就自己出走了。我頂樓房間小天窗邊的紙箱上，有電爐和鋁製的水壺，一旁有袖珍版的英日辭典，雖然我還留有一張小黑無精打采地往外看的照片，但小黑的背影著實令人感到淒涼寂寥，可說是道盡了我當時的生活。

在那之後，我的身邊也仍一直有貓相伴。總歸一句，貓在我40年的人生中，可說是如影隨形般的存在。如影子一般——不覺得這描述就像照片一樣生動嗎？

就在我持續沒有貓的生活約半年之久時，去年6月的某天，我打電話給我的友人高梨豐，他是一位總是養了5~6隻貓的攝影師。「你那裡有沒有什麼不錯的貓啊？」「你問得正是時候，我這裡有一隻昨天才剛收養的小貓喔。」隔天傍晚，我造訪了下北澤一家叫「gray」的飾品店。牠被包裹在藍色的毛巾中，是一隻十

分嬌小的小貓。我將牠放進一個小巧的籃子裡，一路上，直到我返回我那位在神宮前的公寓，我都感到無比幸福。

抵達家中之後，對於陌生的環境，牠也並沒有顯露出畏懼的模樣，而是精神飽滿地蹦蹦跳跳。我聯想到忍者猿飛佐助（Sarutobi Sasuke），希望牠也能夠充滿男子氣概，堅強地成長茁壯，因此將牠命名為「サスケ（Sasuke）」。

然而，サスケ在我家只待了約莫10天左右就失蹤了。牠果然是一隻忍者貓吧，即使我在我家周邊貼了約100張的尋貓啟示，牠終究沒有回來。

在那之後大概隔了兩週，某一天，我接到了一通電話，是一位來自橫濱的女性。她說她在原宿的停車場撿到的一隻貓，和尋貓啟示中的照片長得一模一樣，還說要將貓帶到我的辦事處。我於是準備了三得利皇家威士忌作為謝禮，在辦事處等待著。

然而，那卻不是サスケ。我一眼看到牠的當下，果然還是感到失望了，但我對貓實在是相當沒轍，所以還是說著「唉～那就當作是牠了吧」，並將牠作為第二代サスケ領回了。

初代サスケ的癖好，是咕啾咕啾地吸吮著毛巾（第二代サスケ則是吸吮自己的手掌）。牠真的是個相當可愛的傢伙啊，就連我都被牠迷住了。但因為大家都說第二代是個醜八怪，所以我也不得不為第二代辯護，只好不再說初代可愛了。

7月31號，我帶著サスケ去表參道的步行者天國。因為是小貓的關係，所以年輕女性都說著「哇～好可愛啊～」，並馬上聚集過來。身為花樣中年人的我，得意洋洋地將牠放在肩上讓她們觀看，心情感到有些愉悅。サスケ可是個明星呢。

東京十分炎熱。8月3號，我從新宿搭乘梓8號列車至山梨避暑。對サスケ來說，這是第一次旅行。不知道是不是因為感到緊張，牠表現得相對安份，甚至也沒有大小便。因為牠不過還只是隻小貓，所以也不需要支付乘車費用。在韮崎下車後，要前往位在武川村的山莊，轉乘巴士約要20分鐘，費用是320日圓。但那天我想稍微奢侈一下，於是就搭計程車前往了。

山莊是サスケ的天堂。雜種貓果然很適合在大自然中怡然自得地玩耍。牠甚至將緊張興奮的心情都展現在臉上了。而我自己的表情則是很放鬆。要說現在必須要做的事，也就只有準備サスケ和我自己的三餐而已。工作上的電話也都全數隔絕（雖說也是因為山莊沒有電話），只要一個勁兒地貪圖午睡就好。若是感到無聊，就到釜無川去垂釣、游泳之類的……。我就這樣一邊與サスケ玩耍，一邊拍照來消磨時光。雖然看似頗為無趣，但在暑假的這10天間，我就拍攝了約60卷的黑白照片。

到了9月，已然完全適應了鄉下生活的サスケ，開始想要到外面去而不停喵－喵－的吵嚷著。因為真的太吵了，實在拿牠沒辦法，只好幫牠打開廚房的窗戶。結果，外面的貓以サスケ的食物為目標，也開始出入這裡，這對サスケ而言，可說是生平第一次交到的朋友。

我有時會帶サスケ到我的辦公處。因為有年輕人可以陪牠玩，サスケ看起來也很開心。牠最後甚至和幾乎有牠額頭寬、養在陽台的蟾蜍玩在一起。

サスケ時常打呵欠。10月份，我就只想專注於拍攝牠打呵欠的照片，但牠卻只有在睡醒時才會打呵欠。於是我就會催促牠說「喂，快睡啊！」，等牠睡了之後，又會立刻準備好相機，說「快點給我起來！」，讓サスケ相當忍無可忍。這樣持續了約1個月，由於我也相當努力拍攝，所以打呵欠的傑作可說是堆積如山。我想，這世上恐怕沒有像我這樣致力於拍攝貓打呵欠的攝影師吧。

新年時，サスケ的第一本寫真集『ビバ！サスケ（萬歲！サスケ）』出版了。而一位買了這本寫真的女孩，打電話給我說「我弟弟撿到的貓和初代サスケ長得一模一樣耶。而且就連在飯裡加味噌湯餵牠，牠也不吃，感覺以前日子似乎過得很好，說不定……」。但這個女孩說她的居住地位在茅崎，我想不管是怎樣的忍者貓，都不可能從原宿迷路到茅崎吧。

サスケ！雖然當模特兒或許不是很愉快，但大家看了都覺得你是「日子過得很好的貓」喔。

サスケ現在也已經超過1歲，如果以人類的年齡來說，就是個20歲左右的挺拔青年了。最近牠也變得不太愛嬉鬧。就算我要和牠玩，牠也只會看在我的面子上陪我玩一會兒，之後就一副覺得麻煩的模樣，跑到百科辭典上睡覺去了。不過，我後來又領養了一隻小貓，是一隻3月3號出生（擅自決定的）的母三色貓。牠似乎是波斯貓和雜種貓交配的混種，毛相當地長，名字叫モモエ（Momoe），暱稱モモ（Momo）。サスケ最初感到很害怕，一直不願意靠近牠，總是從隔壁房間窺伺著モモ，並發出「嗚－」的低鳴威嚇聲。但是過了1週之後，牠們的感情就已經變得相當好，モモ還會玩弄サスケ的長尾巴來鬧牠。

而我，則是一邊對著兩隻貓玩耍的畫面瞇細眼睛，一邊專注構思著接下來要拍攝的照片。

初次刊載於:
『サスケ！！　いとしき猫よ』（サスケ！！可愛的貓啊）
青年書館 1978

發行: roshin books
設計: 加藤 勝也
翻譯: ダン･アビー
印刷: 股份有限公司 山田照片製版所

サスケ日誌
深瀬 昌久

物心ついてからずっと，猫とは縁が切れなかった。ぼくの3歳のときの記念写真で抱いている三毛はタマといって，たしか高校生の頃まで生きていたように思う。キバが抜けてしまって，それから1年ほどしていなくなってしまった。老醜をさらすのにたえられなかったのかもしれない。

ぼくは北海道の二代続いた写真館の長男に生まれた。父は家業を継がせるつもりで，ぼくを日大の写真科に入学させた。北海道の北端部にある中川郡美深町から，真新しい角帽を得意気にかぶり，新しいカメラの入った革のギャジットバッグを肩に，意気揚々と38時間かかって上京。美深の自転車屋の田中さんの紹介で阿佐ヶ谷駅近くの味噌屋に落ち着いた。2階の屋根裏部屋は，近くの中央線が通過するたびにガタガタ揺れる。天井の梁はむき出しで，この世のものとも思えぬひどい環境だったが，とにかく青雲の志に燃えていたので，さして苦にはならなかった。

味噌屋の台所を借りて自炊生活を始めた。しかし，続くわけがない。3ヶ月ほどでメシを炊くのがほとほとイヤになり，近所のパン屋のサラダパンか外食券食堂のお世話になることにした。

それにしても，ネズミが多いのには参った。食うものなどあるはずのないぼくの部屋の天井といわず壁といわず，夜中になるとガリガリ，ゴリゴリ。ゴソゴソ追っぱらっても追いきれるものではなく，少々ノイローゼ気味。あるときなど，ふとんの中でなにか動いているので目がさめてみると，黒っぽい，でかいやつがパッと飛び出したのには驚いた。ネズミのおかげで部屋中ノミだらけ。DDTをゴザ（たたみなど敷いてある上等の部屋ではなかった）の下からふとんの中まで，まっ白くなるほどまいたりしたが，たいしてききめがない。思いあぐねて，無理を承知で猫を拾ってきて，クロと名づけた。

しかし，なにしろこっちが腹がへってかなわないという生活だから，クロにはたまにサラダパンを食べさせるだけ。愛想をつかされて家出されてしまった。屋根裏部屋の小さな明りとり窓のそばのミカン箱の上に電気コンロとアルミのヤカン，横にコンサイスの英和辞典があって，しょんぼり外をみているクロの写真が残っているが，そのクロの後姿がなんともうらさびしく当時の生活を物語っている。

まあ，その後もぼくの傍にはいつも猫がいた。つまり，猫はぼくの40年という人生に影のようにつきまとってきた存在なのである。影のようにーこれはまさに写真的ではないか。

猫のいない生活が半年ほど続いた去年の6月のある日，ぼくはいつも5〜6匹の猫を飼っている友人のカメラマン，高梨豊に電話をした。「いい猫はいないか」「丁度いい。昨日もらわれてきたばかりの子猫がいるよ」翌日の夕方，

ぼくは下北沢のアクセサリーショップ「グレイ」を訪ねた。ブルーのたおるにくるまった，ちっちゃなちっちゃな猫。小さなバスケットに入れて，神宮前のアパートまでの道々，ぼくは幸せだった。

家に着くと，見馴れない場所だというのに悪びれる様子もなく，元気にピョンピョン跳ねた。ぼくは忍者の猿飛佐助を連想し，男らしく強く育って欲しいという願いを込めて，「サスケ」と名づけた。

ところが，そのサスケは，10日ほど家に居ただけで消えてしまった。やっぱり忍者猫だったのかなぁ，迷い子猫のポスターを，家の周辺に100枚ほど張ったが，とうとう帰ってこなかった。

それから2週間ほど経ったある日，横浜の女性から電話があった。原宿の駐車場から 拾ってきた猫が，ポスターの写真にそっくりだというのだ。事務所まで連れてきてくれるという。ぼくは，サントリーロイヤルにのしをつけて待っていた。

しかし，違っていた。一目みたとき，やっぱりがっかりしたが，ぼくは猫には本当に弱いたちなので，「エ〜イ，こいつにしよう」と引き取ったのが二代目サスケである。

初代サスケのくせは，タオルをクチュクチュしゃぶることだった（二代目サスケは，自分の掌をしゃぶる）。あいつも本当に可愛いヤツだった。ぼくだって夢中だった。でも，みんなが二代目をブスだというので，ぼくは弁護にまわらなければならなくなり，初代を可愛いといえなかっただけなのだ。

7月31日，表参道の歩行者天国に連れて行く。子猫なので，若い女性が「うわぁ，かぁわいぃぃ」といってすぐ集まってくる。花の中年であるぼくは，得意気に肩にのっけてみせたりしてちょっぴりいい気持。サスケはスターだった。

東京は暑い。8月3日，新宿からあずさ8号に乗って山梨へ避暑に行く。サスケにとっては初めての旅。緊張していたせいか，割合おとなしかった。オシッコもウンチもしなかった。まだほんの子猫だから汽車賃もタダだった。山荘のある武川村は，韮崎で降りてバスで約20分，バス代は320円だ。でも，その日はちょっとおごって，タクシーで行った。

山荘はサスケの天国だ。雑種はやっぱり大自然の中でのびのびと遊ぶのが似合っている。顔つきまでひきしまってくる。ぼくの顔はゆるんでくる。することといったら，サスケと自分のメシを作るだけ。仕事の電話もいっさいシャットアウト（山荘には電話がないからだが）して，ひたすら昼寝をむさぼるだけである。退屈すると，釜無川へ釣りに行ったり，泳ぎに行ったり……。サスケとじゃれ合っては写真をうつしてみたりして過ごす。よほど退屈したとみえて，夏休みの10日間でモノクロ約60本をうつしていた。

9月に入る。田舎の生活がすっかり身についてしまったサスケは，外へ行きたいといってギャーギャーわめく。うるさくて仕方がないので，キッチンの窓を開けてやる。すると，サスケのごはんを目当に，よその猫が出入りし始め，

サスケにとって初めてのお友達ができた。

ぼくは，ときどきサスケを事務所に連れて行く。若い人がいて遊んでくれるので，サスケも嬉しいらしい。ネコのひたいほどのベランダに飼っているガマガエルとも遊ぶようになった。

サスケはよくあくびをする。10月，ぼくはあくびだけにしぼって写真をうつすことにした。しかし，あくびは寝起きしかしない。「おい，寝ろ！」と寝かしつけて，寝たらさっそくカメラをかまえ「こらっ起きろ！」とやるのだから，サスケもたまったものではない。約1ヶ月，ぼくも実によくがんばったので，あくびの傑作が山ほどできた。おそらく，ぼくほど猫のあくびをうつしたカメラマンは，世界にいないのではないだろうか。

お正月に，サスケの最初の写真集『ビバ！　サスケ』が出版された。その本を買ってくれた女の子から電話があり「弟が拾ってきた猫が初代サスケにそっくりなの。ごはんに お味噌汁をかけてやっても食べないし，とってもいい生活をしていた猫みたいだから，　もしかして……」とのこと。でも，その子の住まいは茅ヶ崎だというから，いくら忍者猫でも原宿から茅ヶ崎まで迷子になりにいくのは無理だろう。

サスケ！　モデルも楽じゃないだろうが，人からみれば「いい生活をしている猫」なんだゾ。

サスケももう1歳を過ぎた。人間でいえば20歳前後の立派な青年だ。最近ではあまりじゃれなくなってしまった。ぼくが遊ぼうとしても，義理でつき合ってくれるだけで，しまいには迷惑そうに，百科辞典の上に行って寝てしまう。そこで，ぼくはまた子猫をもらってきた。3月3日生まれ（勝手にそう決めた）のメス猫の三毛である。ペルシャと雑種のあいのこらしく，毛足が長い。名前はモモエ，通称モモと呼ぶ。サスケは，最初は恐がってそばに寄りつかない。隣りの部屋からモモをのぞき見て「ウー」と低いうなり声をあげていた。でも，1週間もするとすっかり仲よくなり，モモはサスケの長いしっぽにじゃれついて，うるさがられている。

ぼくは，2匹の交歓に目を細めつつ，次にうつす写真の構想にふけっているのだ。

初出:
『サスケ！！　いとしき猫よ』
青年書館 1978

発行: roshin books
デザイン: 加藤 勝也
翻訳: ダン･アビー
印刷: 株式会社 山田写真製版所

Printed in Japan
© 2017 Masahisa Fukase Archives for the text
© 2017 roshin books for the book